「韓国併合」100年と日本

吉岡吉典

はじめに――事実を国民の常識に

２０１０年で、日本がすなわち軍事適脅迫のもと、韓国を支配下に置き、植民地にした「韓国併合」から１００年になります。

日本の朝鮮支配は、１９４５年、日本軍国主義がポツダム宣言を受諾して敗北したことによって終止符が打たれ、朝鮮は日本の支配から解放されました。にもかかわらず、日本は、その植民地支配の歴史を反省してきれいに清算しないまま今日に至っています。日本政府は「韓国併合条約」は「国際法上合法」という見解をとってきました。日韓首脳会談を受けて設けられた日韓歴史共同研究でも、日本側学者は「合法」と主張し、「韓国併合」の合否の結論は出されていません。不法に結ばれたという反省どころか、近年それを正当化し、居直る風潮が強まっています。これは、日本が克服し、乗り越えなければならない歴史的課題です。『韓国併合』１００年が、その画期になることを願って、本書を執筆することにしました。「

私が、朝鮮問題に関心を持ってからおよそ五十年になります。私はこの間主として、　①明治政府成立以来の日本の侵略、②武力による威嚇のもとでのいわゆる「韓国併合」による植民地化（韓国では、これを「強占」といっている）、③戦後の日本の朝鮮・韓国への対応＝反省なき日本の実態、の三点を中心にして、日本と朝鮮・韓国との関係をみつめてきました。

本書を、当初そういう柱でまとめようと準備してきましたが、あまりに膨大なものになりそうなので、「韓国併合」１００年にあたってぜひ知っておいてもらいたいこと、考えてもらいたいことにしぼって取り上げることにしました。

それにしても痛感せざるをえないことは、日本の侵略的勢力、人士の朝鮮への野望の強さです。

「この国はわが国に於いて要用の地なり」（軍艦「雲揚」艦長　海軍少佐・井上良馨　１８７５年７月）と言って日本軍の最初の軍事攻撃である江華島戦争を引き起こしたこと、敗戦必至となった１９４５年５月１４日の最高戦争指導会議構成員会議で、ソ連の参戦を阻止し和平を依頼しようとの交渉にのぞむ方針として、ソ連に千島を譲渡することを決めながら、「但し朝鮮はこれを我方に留保すること」を決めていたことの二点に象徴されていると私は思います。戦後日本が朝鮮侵略や植民地支配を潔く反省しないのは、その野望の強さの表れかもしれません。

戦後は同じような正当化の議論が成り立たなくなりました。日本はポツダム宣言の受諾で朝鮮の独立を認めざるを得ませんでした。

ポツダム宣言を受諾した日本政府は朝鮮の「自由独立」を受け入れましたが、それは朝鮮侵略と植民地支配の非を認めたものでも、その反省によるものでもなく、敗戦によるやむをえないものとしてのことで、内心は反対でした。ポツダム宣言受諾直後に外務省がまとめた内部文書「連合国の対日要求の内容と其の限界(研究素材)」(1945・10・25)という文書は、「朝鮮に付(日韓合併条約、韓国併合宣言に対し今日迄米・英・蘇の何れよりも異議ありたることなし)」として、″根拠のない要求″との見方を明らかにしています。１９５１年に講和条約交渉が始まるのに備えて、同じく外務省がまとめた文書「平和問題に関する基本的な立場」の中の「平和条約の経済的意義(われらの立場)」(1950・5・31)では、「日本のこれらの地域（筆者注・朝鮮などポツダム宣言受諾で放棄した地域）に対する施政が決して世にいう植民地に対する搾取政治と目されるべきものでなかった」、「各地域の経済的、社会的、文化的の向上と近代化は専ら日本の貢献によるものであった」と言っています。侵略戦争の反省どころではありません。

こうして、戦後繰り返されつづけた朝鮮植民地支配美化の「久保田発言」「高杉発言」（詳しくは後述します）をはじめとする「妄言」の原型がつくられていきます。日本政府は、１９６５年の「日韓条約」国会での佐藤栄作首相答弁以来、１９９５年１０月の村山富市首相答弁にいたるまで、「韓国併合条約」を「自由な意思、対等の立場で、法的に有効に締結された条約」という見地に立ってきました。

世界は、やがて植民地体制の崩壊へと向かいました。強制によるものではありますが、日本が朝鮮をはじめ戦争で奪った「領土」を全部返還したことは、これも第二次世界大戦が反ファシズム・反軍国主義の戦争だったことと不可分のことだったと思います。

今日の世界は、あらゆる問題で過去を総括し、清算しながら進もうとする時代に入っています。従軍慰安婦問題で日本を批判する決議が広がっているのは、日本がそういう世界に逆らって歴史をごまかそうとするものとみられているからです。

歴史の事実を無視した、居直りや、侵略の美化では、日本への信頼を回復することはできません。歴史の進歩の到達点に立って過去の過ちは過ちとして、きちんと清算して誠意を示すことによって、世界、とくにアジアとの真の相互信頼が生まれると思います。５０年前と違い、朝鮮・韓国に関する立派な本がたくさん出ています。しかしそれ以上に、侵略戦争や朝鮮植民地支配を美化、正当化する出版物が洪水のごとく出版されていること、そして、朝鮮侵略だけでなく、アジア太平洋戦争も含めて、あまりにも明白な日本の侵略の歴史の清算がいまだにおこなわれず、「日本は過去の歴史を清算しないで居直る国」という認識がアジアにひろまっていることを直視せざるを得ません。日本がポツダム宣言を受諾してから６０年以上たつのにこうした状況にあることは残念であり、かつ恥ずかしいことです。

歴史の専門家でもない私が、あえて本書の執筆を思い立ったのは、こうした状況下で、

私のささやかな研究が、侵略の歴史の清算に役立てばと思うからです。そこで私は、本書の限られた枚数の中で、侵略美化、正当化の議論を念頭に置きつつ、日本の「韓国併合」とは何だったかを客観的事実・資料等で明らかにすることに重点を置いたものにしようと思います。

くり返すようですが、朝鮮問題の研究はこの間大きく発展し、多くの分野で優れた研究がおこなわれ、序章で紹介するように、歴史博物館などにも豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争のきちんとした評価を明らかにしたものがあり、また、いろいろの記念碑建設を通じて日本の侵略の反省のうえでの日韓の交流が進んでいる姿を目にすることができます。歴史研究は発展していることも実感しました。

序章にあえて、豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争にかかわる問題をもってきたのは、日本の朝鮮認識形成の上で，神功皇后の三韓征伐の神話と共に豊臣秀吉の「朝鮮征伐」の美化が重要な役割を果たしているからです。豊臣秀吉の朝鮮戦争が、いまも朝鮮人民の怒りを買っている侵略だったことは、佐賀県の名護屋城や大阪城などの調査、研究によっても明らかにされています。それにもかかわらず、その成果が一般国民のものになっておらず、国民の間になお、ねじ曲げられた歴史認識が根強く残っていることに、私は目を向けざるを得ませんでした。

これらの問題を乗り越えるもとになるのは、歴史の事実です。否定できない事実を見つめたいと思います。そして、ありのままの事実が国民の常識にならなければならないと思います。

よく質問を受ける「なぜ朝鮮問題を研究したか」については、「おわりに」に書いておきました。